

「白いぼうし」黒瀬貴広さんの授業から考える

今井成司 24・3・17

1, 学習の目標に関して 質問とその理由

(後に出ている、実際の授業記録を読む前に、目標、と授業の計画・流れだけを読んで、考えたことです。)

8 p. <学びに向かうちから>の、(1)松井さんのまなざしを超えて作中人物の在り方がいかに語られているのについて問い続ける。それは、なぜか? ということか?

むしろ、松井さんのまなざしをもとにして読まなければならないのではないか

○例えば、「白いぼうしは」松井さんにはどう見えたのか。松井さんはそこから何を感じたのか。これを不問にはいけないのではないか。

○例えば、夏ミカンが松井さんにとってはどういう意味があったのか。どういうことを表しているのか。(夏みかんとおいのことは、3から8の授業計画の中では、扱われていないように見える)

◎これらを踏まえて、蝶にとって、また、たけお君にとっての、白いぼうし、を読み、考えるのではないか。其時、夏みかんはどのような位置にあるのだろうか。(対立させるのか重ね合わせるのか。子どもはどう読むだろうか)

○8 p. (3)B、松井さんにだけ、蝶の声が聞こえてくる意味について考える。なぜ、この問いが出てきたのか。

2, 授業の計画、流れについて 質問。

(ここも、実際の授業記録を読む前に、考えたことです)

●9 p. 3から8までの、この課題は感想の後で、2時に、すべて建てられたのか。それとも、その時々の授業の中から、次の課題が出てきたのか。

●9 p. 4, 松井さんには「菜の花横丁」は見えていたのかについて考える。

この課題はどういう話し合いで出てきたのか。これを扱う意味はあるのか。

●9 p. 7, 松井さんにだけ「チョウ」たちの声が聞こえたのはなぜか考える。

なぜこの問いになったのか。どこから「松井さんにだけ」聞こえた、と読んだのか。

「シャボン玉のはじけるような小さい小さい声だったのにどうして松井さんには聞こえたのか」という問いにならなかったのはなぜか。このことと(かかわって)、最後の一文「まだかすかに夏みかんのにおいが残っています」を、感想文の段階で問題にする子はいなかったのか、冒頭との照応を考える子はいなかったのか。

3 実際の授業の記録を読んで

(1) 6 時間目について、問いの問題

「登場人物、それぞれにとって、白いぼうしはどのような存在か」という問いの持つ問題。

(問いは発展する)

不確かな記憶ですが、1960年代。「私にとっての学問とは何か」というような、問の立て方、論じ方が、多く見受けられるようになりました。総合雑誌などに多かったと思います。これは、自分とのかかわりで述べるというもので、鋭い意見が出やすかったと思います。しかし、視点が、固定されるので、ほかのこと、自分が関心を持たないことには参照しないで済むので便利で、論じやすかったのでしょう。その時、主体性、という言葉もはやりました。

「たけお君にとって、「白いぼうし」はどういうものだったのか」を考えると、便利なもの、虫取り網の代わりになるもの、蝶を入れておくもの、閉じ込めておくもの、となるでしょう。あまり大事じゃないものという意見も出るでしょう。道端に、置いていても、かまわないのだから。たけを君の視点をなぞっていくところなると思います。

そうすると、赤い刺繍糸で「たけのたけお」と縫い取りをしたお母さんの思いが、こもっている、ということまでは読めません。たけお君は、そこまでは意識していないからです。読み手、あるいは、松井さんには、白いぼうしに、お母さんの愛がこもっていることがわかるのです。

だから、問いは、このままだとしても、そこから、たけを君の意識を超えて、客観的（広い）な意味にまで、授業では、広げていく必要があると考えます。実際の授業ではそうなりそうでしたが、展開していかなかった。（授業の仕方のところで触れる）。

これは、「松井さんにとっての白いぼうし」とは何か、でもいえることです。「おや、車道のあんなすぐそばに小さな帽子が落ちているぞ。・・・車がひいてしまうわい」「そして帽子をつまみ上げ・・・」＝このままにしては置けない、車にひかれてはいけない、人のかぶるものだから、粗末にできない。風で飛ばないように『つばに、いしをのせた』＝丁寧に扱うべきもの。という存在までは読めるでしょう。

ここから、赤い刺繍糸で「たけのたけお」と名前が縫い取りしてあるのを見た、松井さんの思いが浮かんでくる読みに進めていくにはどうすればよいか。工夫が必要でしょう。そうすることで、「松井さんと夏みかん・お母さん」「たけお君と白いぼうし・お母さん」が重なります。（教育出版では、たけのたけお と一行で、囲みに、光村も、一行独立して「たけのたけお」（カギかっこ）になっています。子どもはここに何かを感じたはずです）

ですから、初めの問いは、これでよいとしても、実際の授業では、ここから、発展していく必

要があるでしょう。

(2) 6時の授業の展開にかかわって

教師の問いに対して、子どもの発言が、とても自然で、発言しやすい教室になっています。明るい感じのする教室です。

① たけお君にとって、白いぼうしとはどういうものか。

この話しあいでは、最初に、「C1：大切なもの」という答えが出されます。ここで教師は「なんでそう考えたの」と聞き「C1：モンシロチョウを捕まえるために大切なもの」と答えています。あとはこれに沿った、話し合いになりました。C1の発言を受けて「大事なもの、大切なものと考えた人、他にいますか」と教師が聞いたとしたらどうでしょうか。多分、これに類した思いを持った人はもっと、いたと思います。そして教師が「どこでそう思ったのですか。どこからそう考えたのですか」と聞いたならば、「たけのたけお=表記の協調部分」「刺繍糸」「縫い取り」→「お母さん」のたけお君への思いに発展していったのではないのでしょうか。

(ただし、この方向は、黒瀬さんは目指していなかった？「たけお君にとって=主観性」、「たけを君のまなざし=限定された視点」には、この刺繍糸は、入ってこないからです。)

さらに、「まだ(ほかに)ある」という教師の問いに対して「C14：面白いもの」という答えが返ってきます。ここが授業の中で、面白いところでした。以下、子どもの発言が続きます。

c 1 6：だってさあ、急にさあ、みかんになった

C 6：確かに急にチョウからみかんになった。

C 1 0：えっ、でもあれでしょ。チョウがみかんになったと思っているんでしょう。

C：夏みかん！

C 1：化けたって思ったんだよ。たけのたけおくんは。

C 2：チョウから夏みかんにばけたら「うおーとなるね(笑い)。

C 4：びっくりしたってことだね。

T：びっくりしたってことだね。・・では、蝶にとっては・・・」

と教師は次のことへ展開してしまいました。その前に、最初の問い「白いぼうしは、たけお君にとってはどういうものか」と、この話し合いを結び付けることができたのではないのでしょうか。(今までは経験しなかったことが白いぼうしで起こっている＝「面白いもの」)

「では、たけお君にとっては、どんなぼうしなの？」と聞いてもよかったと思います。

(でも、一言で、うまくまとめるのが難しい。それが4年生です。おそらく、具体的な言葉、前の繰り返しが出てくるでしょうがそれでもいいと思います。ところで、この話し合いは、運転しながら松井さんが想像していた部分の読みに基づいています。松井さんの創造した内容を、事実・出来事として読んでいます。私は、それでいいと思います。)

*イメージが生まれやすいところ、出来事が展開しているところでは子供の発言が活発になります。具体的になるからです。

② 「チョウにとって、白いぼうしはどういうものか」

ここでは、文章には、記述がほとんどないので、「考える」ことになります。「嫌な奴」「警察みたいなもの」と続いて「虫かごのようなもの」と具体的になって、話が進みました。

③ 男の子とチョウ・女の子を比べる。

何を比べたかったのか

「T、男の子の場合とちようちよの場合、なんか、黒板を見て比べて、気づくことない？」
ここで子供たちは、「比較する。くらべる」という位置に立ちます。男の子の気持ちを、虫を捕まえた体験を出しながら話し合います。チョウの気持ちを「悲しい」と想像します。「C4：男の子にとってはうれしいんでしょう。でもチョウにとっては悲しい？」とまとめます。「白いぼうしとは？」への向かい方が、気になります。何のために、何を比べたかったのでしょうか。

④ 「松井さんにとっては白いぼうしはどういうものか？」

女の子と、男の子を比べているときに、急に子どもから出された問いです。

「C16 えっ、じゃあ、松井さんはどうなの」

教師は「松井さんにとって、帽子はどういうものなのかって？」と、受け止めて、子どもたちに聞きます。*

「C2：変なぼうしかと思った。」の後で、「C9：チョウにとってはありがたい」「C11：開けてもらってよかった」と、松井さんの行為とチョウの松井さんへの思いへとそれていきます。「C14：チョウにとっては松井さんはいい人だったのかな？」「C6：ありがとう、だったのかな？」「c13：命の恩人！」と話が続きます。ここで教師は、問います。

「みんなが言っているところには変なところがあるよ」

「C：変なところ」

「C16 なんで、変なところって、なんで？」。C16のうろたえぶりが見えるようです。

「C4：先生、何ページ？」。子どもの、驚きが伝わります。

だから、いい問い直しだと思いました。ここで、教師は松井さんが、帽子を振り回したところを読みます。聞いていた子がつぶやきます。「かわいそうに・・・」。チョウの身になって感じています。

この後は、「C4：松井さんて優しくないじゃん」の発言を受けて「C13：人間てひどすぎる」「人間と生き物」の関係へと発展？していきました。子どもにとっては劇的な展開です。

面白いのですが、「松井さんにとって、白いぼうしはどう見えたのか。何だったのか」がほとんど話題にならなかった。授業者の意図はどこにあったのでしょうか。

その他

●C1さんの発言で、気づいたこと。この子は、話し合いをリードする子だと感じました。よくできる子だと思います。気になったのは13p「C1：男の子って最低？」。その少し後で、松井さんのことをp14「C1：最低じゃん」と言っています。よく発言し、話をリードする

子ですが、ここが気になりました。

話しあいだけでなく、しっかりと、考えを書く時間もとるといいのかもしれませんが。

●（*）C16さん。この子は、聞きながら、その言葉をなぞりながら考えているのがよくわかります。しかも、飛んでいます。ここがいいと思います。たけお君とチョウについて話し合いをしていたのに、「C16：えっ、じゃあ、松井さんはどうなの」と急に松井さんに話が飛びます。これを受けて、教師は「松井さんにとって、白いぼうしってどういうものなのかっていうこと？」と授業を転換しました。14p「C16：松井さんって何歳ぐらいなのかな？」急に、こう言います。「松井さんは優しい」を問い直す大事なところでした。しかし、教師はこれを受け止めます。「T：ああ、何歳ぐらいなんだろうね」。いい反応ですね。ここでの話し合いは、松井さん、運転手、お母さんの存在へと話し合いができています。しかし、なぜ、C16はこの時に、松井さんの年齢が気になったのでしょうか。

*「C16・松井さんはどうなの？」という発言は、何を指しているのか、不明です。松井さんにとってのぼうしなのか。松井さんの生き物に対する姿勢なのか。教師は、帽子との関係ととらえて進めましたが、話し合いはチョウにとってはありがたい、という方向に進んでいきました。

(3) 7 時間目について

① 「なぜ松井さんにだけ、シャボン玉の割れるような小さな声が聞こえたのか」。この問いでよかったのか。（どこから「松井さんにだけ」と読んでいたのか？）

② （この過程で、「シャボン玉の割れる音は絶対に聞こえない。それなのになぜ聞こえたのか」という展開になっていますが、「それは比喻だよ、例えだよ。シャボン玉の割れる音と同じ音じゃないよ」こんな声が出なかったのか＝言葉についての指導があるべきではなかったか。

③ したがって、授業では割れる音に集中しています。本文の記述は、松井さんにはこんな声が聞こえてきました。よかったね。よかったよ。よかったね。よかったよ。それはシャボン玉のはじけるような、小さな小さな声でした。車の中には、まだ、かすかに、夏みかんのにおいが残っています。とあります。この文をもとにして、どんな声ですか。どう聞こえたのですか。なぜ、松井さんには聞こえたのでしょうか。その時、松井さんはどうしていましたか。車の中の様子はどうですか。このような読みがあったのではないかと思います。

（ただし、黒瀬さんは、絶対に聞こえない、聞こえるはずのないシャボン玉の割れるような音が、松井さんにだけ聞こえるとは、どういう事態だったのか、を問題にしていた）

★子どもの感じ方のすごさ、表現をもとにして考えている

④ 「C6：夏みかんを最初と最後に出して、大事だったんだよ」（20Pの発言）はどういう話し合いの中から出てきたのかわかりませんが、C6さんは、大事なところをとらえています。冒頭、末尾の照応をとらえています。「ここに大事なものがある」。表現・構成上の特徴から、夏みかんの位置づけをしようとしています。

大事なわけ、に向かって、ここから読みが深まります。

「C 2 : ああ、大事だったんだね」

「C 1 2 : 夏みかんがあったから、このお話ができたんじゃない」

「C 1 1 : だから、松井さんは帽子をあけて、逃がしちゃったから、がっかりしているけれど、夏みかんを入れたから、大事なんじゃないかということ」

「C 6 : そういうことか。夏みかんめっちゃ大事じゃん」

「C 6 : だって、帽子の中に夏みかんを入れて、なんか、だから、えっと、あれ、わかんなくなっちゃった。」話が続きます。

「c 1 4 : いっぱいじゃなくて、酸っぱいにおいのする夏みかん」

「c 1 2 : しかも、一番大きいのだよ、あまりうれしくて一番大きいのを置いたんだよ」

「C 2 : 待って、わかったかもしれない。だって、小さな小さな声だったんでしょ。でもさあ、夏みかんは速達で送られた中で一番おおきいのを選んだ。これ逆になっているじゃん。それでさあ、その声が聞こえたのおは、夏みかんがこの作品の中で、本当の大きさはなくて、存在がすごく大きいということじゃないかなあ」

集団で考えることができていたと思います。具体的な表現をもとにして発言が続きました。

子どもたちは、どこかで、気づいていたのでしょうか。それがC 6 さんの発言であふれ出てきました。「(夏みかんが、ずっととと出てくる。) これは、松井さんにチョウたちの小さな聞こえたことと、関係してくるのではないか」。重要な発言です。これを深めることになりませんが、次回にやればよかったと思います。

●やはり、この作品の良さ、がここでも出ています。

「小さな小さな声」「一番大きな夏みかん」「酸っぱい匂い」「かすかにおいが残っています」。「小さな野原」など。こういう表現・言葉を、どこかで子どもはとらえています。それが「小さな小さな声が、松井さんに聞こえていました」につながるように感じたのでしょうか。ただ、うまく、繋げ、まとめて、言葉では表現できません。それが4年生だと思います。無理して、言わせなくてもいいと思います。

ですから「C 2 : 実際の夏みかんの大きさではなく、夏みかんの存在が大きい」についてもっと、話合うとすれば、もう一時間とって、授業をしてもよかったと思う。

●問いを出したC 6 さんの発言について。話し合いの中で「だって・・・なんか、だから・・・えっと、あれなんかわからなくなっちゃった」となっています。ここもよく考えている表れです。今まで、直面しなかったこと、考えたことがなかったこと、新しいことに、この子は向き合っています。どうつながりがあるのか、考えているのだが、わからない、ということでしょう。(実は5年生の頃の私がそうでした、話している途中で、うまく言いなくなってしまって、先生からは「もういい」と言われてしまって、もう発言するのが嫌になったのです)。この子には、あとで、本分を読み直して、整理して考えることを要求してもいいと思います。うまく言えない、とぎれとぎれに言う、これは思考が働いているか

らです。一気にまとめて言わせない、黒瀬さんの指導に賛成です。

C2さんは、「待って」だって」「それでさあ」「でもさあ」と、本文にある出来事をつなげて、考えています。間投詞は思考を促すものになっています。こういう子に育てたい、と思います。こういう子たちは、文章に書く、ということで、思考が深まると思います。

最後7時の授業では、やはり、作品の内容（具体的な表現）にかかわって、授業が盛り上がりました。難しい問いでしたが、抽象的に論じるのではなく、出来事、表現・言葉をもとにして、そこから、ちょっと飛躍する、離陸する＝自分の考えを持つ。それでいいのだと思います。

子どもたちに、教えられる授業でした。

24・3・15